

〔書評〕

小島祐馬著

中國の革命思想

中國の革命が進展して、そこに生起する諸事實が國際社會の動向に至大の影響を及ぼしているこのごろでは、中國の現状を理解するために主として二つの方法がとられている。

その一つは孫文以後における中國の歴史をこまかに跡づけることによつて、その現状を把握しようとするもので、この傾向を代表するものとしては、たとえば中國研究所による人たちがあげられる。これに對してもう一つの方向は、中國を遠い過去から現在に至るながい歴史の中において捉え、いわば中國の本質を形成するものを理解することによつて、現在の状況を了解しようとするもので、この傾向を代表するものとしては、主として京都大學で育つた人たちが存在する。小島祐馬博士の近著「中國の革命思想」はこの後の立場に

立つて「現代中國革命の理解」に役立てようといふもので、博士の該博な知識と透徹せる構想力は、この博士の意圖を充分に實現しているようである。

本書ではまず「緒言」で中國革命思想の特質を述べて、中國の革命思想が、近代資本主義社會成立以後において發生した西歐の革命思想と異つて、ある時代ある階級の思想ではなく、中國思想史をつらぬく三千年來一貫せる一つの根本思想であることに注意され、中國近代の革命理論が、西歐近代の人民革命の理念の影響をつよく受けるものであることを認めつつも、その背後にある中國固有の革命的傳統を輕視してはいけなるとされている。

これは本書をつらぬく基調であり、見かたによれば、博士はここで、中國近代の革命運動が中國固有の革命的傳統と異質のものであることを、中國精神史のうえにおいて多少輕視しておられるともいえるので、ここに現代中國革命を理解するうえにおける一つの重要な論點が提示されている。

つきに第一章の「中國革命思想の系譜」では、中國の尙古主義がギリシヤのヘシオドス

に見られる素朴な没落觀とも、またキリスト教や佛敎に見られる宗教的な意味を含んだものとも異り、循環史觀ともいふべきものであるとして、その循環史觀の現れを陰陽思想、

易、五行思想、宋學に見、この循環史觀の根柢には天人合一の思想があり、そこに革命思想の起源があるとされる。夏殷周の政治革命さらには社會革命すべてを是認することが革命思想の内容であり、その具體的な現れとしては、禪讓放伐の思想とか、文質三統説とかがある。政治革命の理論は儒家において問題とされ、周書に見える殷周革命の理論、孟子の革命理論、張橫渠の説、黃宗羲の明夷待訪錄に見える意見などに、それぞれ多少の變化と發展を含んで現れている。しかしかかる革命理論は現實には革命の眞實を示しえないところがあり、そこに逸民が發生し、個人主義の思想が現れる。この個人主義を基調として、政治革命を否定する社會革命の理論を展開するものが老莊の思想である。そしてこの儒家の政治革命の思想を含む徳治主義と老莊の無政府主義とが併存しうるのが中國の現實の社會であつたが、郡縣制度を布き知識階級の支配

という政治形態をとつて、固定的な階級の差別を認めなかつた漢以後の社會においては、そのことによつて階級的對立が緩和され、また農民に對して國家のとつた態度もこれを助けるに力があつた。しかし一方においては、中國における民族意識が異民族支配下の中國において革命を惹起する有力な要素となつていたと述べておられる。この章においては、簡潔な叙述のなかに博士の本領が隨處に發揮され、もちろん微疵を探せば二三問題となる個處がないでもないが、全體としては非常に要領よく過去の中國における革命思想とそれと關係のある事態がまとめられている。

つぎに第二章の「現代中國の革命とその思想」においては、まず辛亥革命に至るまでの清末における革命運動が略述され、清末の革命運動は列國の中國侵略といふことにその根本的原因が存しており、そこに變法自強の改革意見と三民主義の革命理論が現れることになつたが、それには自蓮教の亂や太平天國の亂などに見られる民族意識がはずかつて力があるとされる。つぎに康有爲一派の變法自強説に基く戊戌政變の思想的背景を取りあげ、

この變法自強説が民主主義的體制による立憲君主制の樹立を眼目とし、日本を當面の手本としたものであることを明かにしつゝ、康有

爲と公羊學の關係、康有爲の大同書に見える思想、譚嗣同の仁學の思想、梁啓超の新民主義が、その背景をなすものとして解説される。第三に辛亥革命の指導理念として、章炳麟の民族革命の思想とその革命的道德論、五無論が孫文の初期三民主義とともに論ぜられる。そして最後に辛亥革命以後における三民主義の發展が取りあげられ、辛亥革命以後における事態變遷の概説と孫文晩年の思想の解説と中國共產黨と三民主義との關係の略記が行われる。この章において顯著なことは、康有爲、譚嗣同の説がボルシェヴィズムと相違する個所を明かにし、孫文の三民主義が過去の革命的傳統と密接に結びつくものであることを最大限に主張し、孫文のマルクシズムに對する批評を取りあげ、その差別を強調しているところなどに明かなように、現在中國に行われている革命を、過去の中國の傳統的革命思想と結びつけて説明する努力がはらわれていることであり、ここにこの書の特徴があ

るとともに、またここにこの書の有する問題點があると思われる。

これが本書の内容の簡単な見とり圖である。したがつて本書においては、中國の革命思想が過去から現在に至る廣い視野の中で捉えられ、その全體を見わたすことができる點において、また現在行われている革命の中にひそむ傳統的なものを明かにした點においてきわめて優れた特徴をもつているといふことができる。ここに本書の有する長所があると思われるが、望外の願いをいえば、第一章と第二章との間に緊密な關係がかけられているように見えること、また現在の革命思想が過去のものといかに異つているかといふことについての突きこんだ説明にかけていることなどがその足らないものを思わせる。しかしここに博士のこの好著を得たことは學界の大きな收穫であり、われわれはこの書の意圖するところを十分に了解し、そのうえに立つてわれわれの立場を決定することが必要である。本書のもつ價值はきわめて大きいものがある。

(昭和二十五年三月・弘文堂・B6・一六
六頁・一三〇圓) 石黒俊逸